

予測不可能の予測

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

何か月か前、とある新聞で目にした記事のこと。かつてリーマンショックが起こった時に当時健在であった英国女王が経済の専門家たちに、どうしてこのような事態を予測できなかったのか、と尋ねたというコラムがあった。それに対し、件の学者先生たち、我々経済学者はこのような事態を予測することが不可能であることを既に予測していたと述べたのだとか。筆者が読んだものを要約して述べている点はお許しいただくとして、ひっかかりを覚える内容であった。

予測不可能の予測とは何か。筆者が所属する工学分野では、対象とする事象の時間平均値は決定論的にある程度予測できる、いや予測できるように努力をしていると言った方が正しい。たとえそれが現象論的、言い換えれば確固たる理論体系ではなく経験則的にであっても、ある程度の予測が立たない限り、機器の設計などまるできれないことになる。寸法を決めることさえ、(最終的にエィヤーと決めるにしても) おおよその範囲で全体のおさまりが付くように決定するための指針は不可欠である。予測不可能といって予測しないなど、機器の設計ではまずありえない。

翻って実際の事象、例えば気象などについて考えてみよう。気象の予測は不可能ではなく、現在では時空間にわたっての綿密な計測データの積み重ねと精緻な(これはすべて「物理化学的に正確な」という意味ではない)コンピュータシミュレーションによってある程度の正確さで実際予測が行われている。ある程度というのは確率的にある程度の分散を許容してという意味であり、降水確率なるものはその典型といえる。とすれば、経済分野でもグローバルな意味で経済上の各種データを観測し、過去の事例も参照しながら、ある程度の揺らぎも許容すれば、そこそこの予測は成り立つはずであろう。

ある一つのものを見ても各人それぞれの思いやそれに触発された行動は同じではない。個々の人間の行動や思考の予測は確かに難しいが、集団になるとその行動は比較的単純な仕方で推移するように見える。すなわち細部に拘泥しなければ、大局はある程度見えるようになる。そうやって Edward Lorenz はストレンジアトラクターを発見し、初期値依存性を有する非線形力学系、つまりはカオス理論の先鞭を築いた。

さて、本稿頭書の事例である。果たしてあの記述は本当なのだろうか。もし件の経済学者たちがその通り述べていたとしたら、何をかいわんやである。上記の非線形力学系やカオス理論、さらにはカタストロフィ理論などは、既に様々な分野、特に社会現象や経済問題(マクロ的)にも適用されているかもしれないが、現実問題との乖離はまだまだ大きいに違いない。大局的視野に立った理論は細部を捨象していることから、具体的な局所瞬間問題に適用できないのは当然である。そのような事情を考えると、件の経済学者たちが無頓着に予測不可能を予測しているなどと言ったとは、どうにも信じがたい。経済理論について十分な理解を有しない一般人としては、リーマンショックのような大規模な揺らぎがいつどこでどのようにして起こるのか、いわば決定論的な意味に

おいて経済学は予測できないのかと問うだろう。それに対して専門家、とくにマクロ経済学者は経済を大きな流れとしてとらえているのであるから、答えとしては、局所瞬間の事象についての予測は不可能である。しかしながらマクロ経済理論はそのような大きな揺らぎの存在を否定するものではない、となることだろう。つまりは、この議論には質問者と回答者の立ち位置や基本的な関心について考慮する必要があるというわけである。

筆者が読んだ新聞のコラムは、女王と経済学者とのやり取りを揶揄したよう受け取れる文章であった。女王の問いに対し、経済学者は経済の基本的な仕組みやそれに基づく大局的な事象と理論などについて進講したことだろう。その一部を切り取って面白おかしく記事にしたとすれば、真の報道とは言えないように思うがいかがだろうか。新聞を始め報道の難しさはここにある。

失敗学の泰斗、畑村洋太郎東大名誉教授のいうように、人には見たいものしか見えないし、聞きたいことしか聞こえない。自らが深く理解できたことしか、相手に伝えられないのである。見たい、聞きたい範囲を少しでも拡大する努力こそ、我々がなすべき責務なのではないだろうか。報道する側、受け取る側、どちらもお互いそれぞれに。

